

中国・成昆鉄道と食堂車の逸品

もう 15 年も昔のことになる。憧れの「成昆鉄道」へ乗るチャンスが訪れた。それまでに、中国大陸の列車には何度か乗車した。特に、首都北京と商都上海をつなぐ京戸（ケイコ。「こ」はサンズイに「戸」と書く）鉄道は、まだ独り立ちしていなかった当時の中国では、国家経済の大動脈と誇って憚らない。ただ、旅行者からすれば、比較的平坦で、都市を貫通する幹線鉄道には、旅の醍醐味といってもいい好奇心や、興奮、物珍しさ、意外性などはあまり期待出来ない。その意味で子どものころ話に聞いていた、この「成昆鉄道」の魅力、つまり人跡未踏？の山岳地帯の 400 を超えるトンネルと 40 を数える鉄橋の合間に濁流渦巻く溪谷を走り、高低差の大きい山中をループ線で上り下る列車は、想像するだけでもロマンを掻きたて、手に汗握り身体全体が興奮してくるのだ。

列車は夏のある午後、諸葛孔明を生み、詩人杜甫を輩出した四川省の省都、成都を出発した。終着駅雲南省省都の成都まで約 19 時間、約 1,100 km の長い旅である。静かに滑り出した列車は、2 時間あまりして「蛾眉山」と書かれた駅に停車した。なんとかの芥川龍之介が著した、あのカリスマ的な仏教名山、「蛾眉山」ではないか。見れば車窓から妖怪な山容が見える。すでにスタートから好奇心を掻き立ててくれるに十分なムードだ。

わたしたちには、軟座車（グリーン車）1 室 4 人、上下 2 段ベッドのコンパートメントがあてがわれた。まだ幼い顔をしたお世話役の女性が、感じのいい所作で旅客に湯茶をもてなしてくれる。だが、硬座車（二等車）でひとかたまりになっていた、武装した中国軍兵士たちからは、彼らや、鉄橋、停車駅、車内にカメラを向けた途端、キッと制止させられた。一瞬緊張が走る。写真もうかうか撮れない。

成都を離れるにつれて徐々に勾配を上げ、山岳地帯へ入ってくる。岩肌の鋭い溪谷地帯を通ったかと思うとトンネルの連続である。トンネルを出たかと思うと今度は列車ごと豪快な水しぶきを浴びる。田畑の真っ只中を走り、農耕牛が寝そべっている牧歌的な風景に触れたり、畦道を歩く子どもたちが手をあげたり、変化に富んだ和やかな風景は厭きることがない。

夕食に食堂車へ行ってみることにした。質素なユニフォームの給仕が注文を聞きに来る。勧められるメニューの漢字を見て、旨そうな料理を片っ端からオーダーした。狭い厨房で窮屈そうに料理している年配のシェフだが、なんと腕がよく味の良いことだろう。脂っこいが、絶妙な味である。その中で柔らかい骨付き豚肉が極め付きの逸品だった。口の中で柔らかくとろけるように甘い豚

肉の感触は、絶品である。広大な中国大陸をゆっくり走る扇風機付きの古い食堂車で青島ビールを飲みながら、愛想のいい給仕ととりとめもない会話を交わして、本場のグルメを賞味する満足感と幸福感はとても口では表せない。

金江から読書舗にかけて荒れた森林伐採地の中を大きく弧を描きながらループ線を下りだした。山中の駅頭には、薦被りをした少数民族らしい小柄な一群がじっとわたしたちを見詰めている。滅多に通らない列車を物珍しげに見学に来ているらしい。山岳部には、まだ電気などのライフラインも十分に敷設されていないようだ。灯かりの灯らない小さな部落を左右に見て、上段ベッドで心地良く睡眠をとった。適度な揺れはゆりかごである。翌朝ガヤガヤという人の声に目が覚めるともう終着駅は近い。幻想的で穏やかな旅のエピローグは、がなり立てる大都会？昆明駅の無粋で喧騒な案内放送だった。

(近藤節夫)